

法住寺の概要と歴史

法住寺は、12 世紀半ばに後白河上皇（1127～1192 年）によって建立された巨大な寺院・宮殿の名前を受け継いだ名誉ある寺院である。もともとの法住寺は鴨川と京都の東の丘（東山）の間の、七条通りに沿ったエリアに、14 ヘクタール以上（サッカー場 10 面以上）の広さの敷地を持っていた。住居としての宮殿が複数あり、有名な三十三間堂を含む仏教寺院も数多くあった。

隣接する三十三間堂とは対照的に、法住寺は観光客が立ち寄るような場所ではない。そのかわりに、この寺は、地域の人々の信仰と強く結びついており、人々はここを頻繁に訪れ、計り知れない価値と強力な宗教的効力を持つ宝物を前にして祈りを捧げる。その中でも最も重要なものが、本尊である不動明王である。不動明王は、恐ろしげな外見をしているが、それとは対照的に無限の慈悲の持ち主である。法住寺の不動明王像は、信者の苦しみを自らの身に移すという特別な力を持っていると考えられている。毎月 28 日には、不動明王の前でドラマチックな火の儀式が行われる。火に投じられる木の板には、人々の願いが託される。この儀式や、そのた法住寺の本堂で行われるすべての儀式は、檜板の壁の中に埋め込まれた水晶を通して輝く太陽の光によってさらに神秘的になる。

本堂の奥、寺院の（伽藍の）物理的な中心の近くにあるのが、阿弥陀堂である。この建物の中には後白河法皇自身の像が祀られている。この像は平安仏所・江里康慧によってほられたものである。また、後白河法皇の墓にある像は高名な工芸家である運慶（1150～1223 年）によって彫られたものであると言われている。像は金箔を貼ったキャビネットに納められ、一般には公開されていないが、寺の伝承によると、三十三間堂の 1001 体の観音菩薩像は、実際、この像のほうを向いているのだとされている。同じような配列が後白河の墓にもある。その墓は法住寺のすぐ東隣にある。もともとは同じ寺の敷地内にあった上皇の墓は、明治時代（1868～1912 年）に宮内省に譲渡された。この墓は今も阿弥陀堂の東側にあり、法住寺からは小さな庭と低い塀越しに見ることができる。